報道各位

2017年1月20日
福井県大野市

【新しい地方創生】のカタチ

“水への恩返しをするまち” 福井県大野市はCWP活動を通じて
水環境に恵まれない地域への支援とともに市のブランディングを図ります

アジアで最も水環境に恵まれない国・東ティモールで「水のまち・大野市」が給水施設の設置支援に着手

～２０１７年７月に２基が完成予定～

「水」による産業創出と魅力的なまちづくりをめざす福井県大野市(市長：岡田高大　以下、大野市)では、人口減少対策プロジェクトの一つとして、まちの“財産”であり“アイデンティティ”でもある「水」をテーマとした「水への恩返しCarrying Water Project（キャリング ウォーター プロジェクト)」を展開しています。これは、恵まれた水環境の中で暮らしてきた大野市が、改めて水への感謝の思いを表すことで、市民や関係者に気運を醸成し、まちへの誇りと自信を強めてもらう活動として始まりました。

本プロジェクトの一環として、アジアで最も「清潔で安全な水源の確保に苦しむ国」である東ティモールへの水支援を、公益財団法人 日本ユニセフ協会を通じて行い、現地の子どもたちが清潔で安全な水へアクセスできることを目指すことを２０１６年１月に発表しました。このたび、大野市職員らが現地視察を実施し、エルメラ県、アイナロ県の２ヵ所にて２０１７年７月の給水施設の完成に向けての準備が始まったことを確認してきましたので、お知らせします。詳細は次項以降をご参照ください。

東ティモールの給水設備イメージ(既存設置施設)

■東ティモール　現地視察概要

２０１６年１０月に大野市職員らが、東ティモールを訪れ、日本ユニセフ協会により既に給水施設が支援されている集落と、大野市が給水施設を支援する集落を視察しました。視察活動の概要は以下の通りです。

【日程】　２０１６年１０月１７日～２３日
【訪問場所】　東ティモール民主共和国　ディリ、エルメラ県（ポエテテ村ギギマラ集落、ウラホー村ハトライレテ集落）
【参加者】　大野市　今　洋佑　副市長
大野市産経建設部建設整備課湧水再生対策室　帰山寿章室長
大野市企画総務部企画財政課結の故郷推進室　吉田克弥室長
ほか、日本ユニセフ協会・通訳・カメラマンなど含め計７名
【目的】　大野市が２０１７年より支援する東ティモール指定募金（水と衛生事業）の支援対象地域への事前視察、およびユニセフ東ティモール事務所との関係構築

＊視察内容の詳細は、**１月２８日（土）午後７時**からツイタチビル（大野市元町８－１５）で開催する**「大野の水と未来を語る集い」**にてご報告いたします。また、元ユニセフ駐東ティモール事務所代表（現在は関西学院大学学長招聘客員教授）の久木田純氏をお招きし、東ティモールという国の状況をご紹介いただきます。

◆久木田純（くきた　じゅん）氏　プロフィール
関西学院大学学長招聘客員教授／元ユニセフ・東ティモール事務所代表

西南学院大学文学部卒、シンガポール国立大学社会学部留学、九州大学大学院教育心理学修士、同博士課程進学。1986 年よりユニセフ駐モルディブ事務所に JPO として派遣され、ユニセフ駐日事務所（リエゾン・オフィサー）、駐ナミビア事務所（参加型コミュニティー開発担当）、駐日事務所（副所長、外務省、JICA との事業協力、資金調達を担当）、駐バングラデシュ事務所（副所長）、ニューヨーク本部事業資金部・上級アドバイザーなどを経て、2007 年より駐東ティモール事務所代表、駐カザフスタン事務所代表を歴任。2015 年より関西学院大学学長直属 SGU 招聘客員教授。

「水」によって文化が創られてきた大野市は、市民の皆さまとともに昔から水環境の保全に取り組んできました。安全な水を確保できない東ティモールの現状を伝えることで、大野の恵まれた水とその環境を見つめなおす機運とし、水への感謝の思いの醸成につなげていければと考えております。

生活になくてはならない水は、「当たり前」ではなく「有り難い」存在であることを再認識するとともに、東ティモールへの支援などを通じて、大野の「水への恩返し」を市内外へ発信することで、市民の皆さまに誇りと自信を持っていただきたいと思っております。

■東ティモールへの支援内容

山の湧き水を水道管で麓まで引いてくる「**重力式給水システム**（ＧＦＳ）」の設置。
この設備は、山岳地帯で険しい斜面が多い地形を持つ国の事情に合ったもので、
標高の高い湧き水や泉などの水源から標高の低いコミュニティまでパイプでつなぎ、
重力という自然の力を利用して水を供給する仕組みです。
費用対効果が高く、二酸化炭素を排出しないので環境に優しいシステムです。

◆具体的な活動

1）エルメラ県、及びアイナロ県の教育局・水道当局と連携のうえ、重力式給水システムを優先的に導入する 6 つの学校ならびに地域を特定。

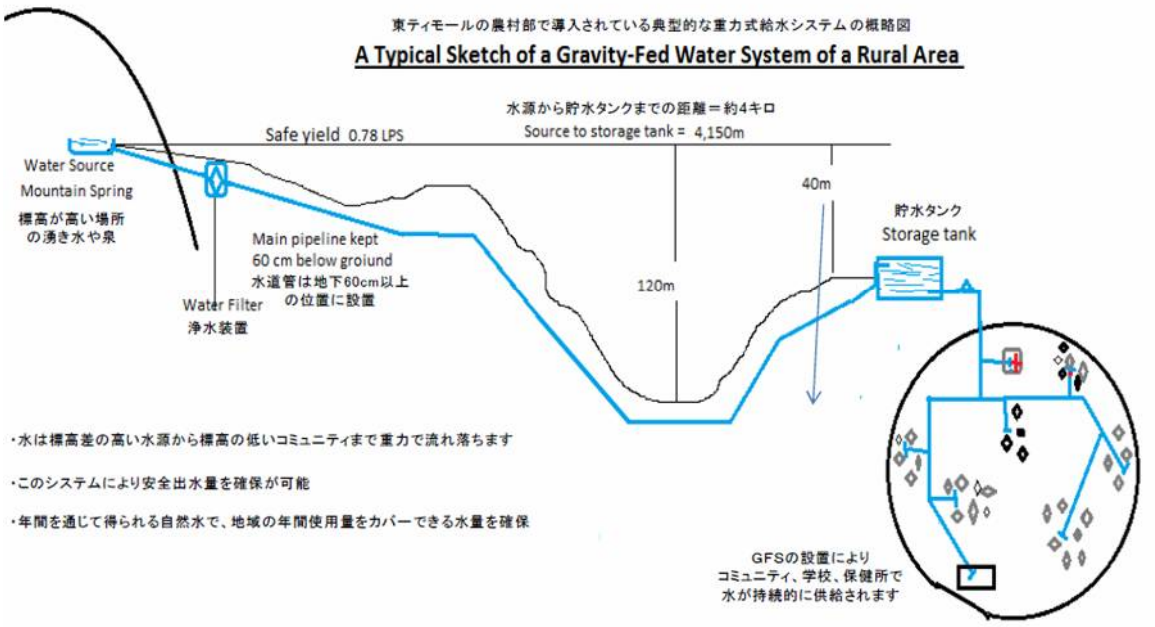
2）学校の責任者・生徒、および地域住民が、重力式給水システムを設置・管理できるよう行動計画の策定を仲介。

3）6 基（年間 2 基）の重力式給水システムの設置を実現。児童・生徒（1,500 人）と周辺地域の人々（1,800 人）が安全で持続可能な水にアクセスできるようにする。

4）教師と生徒、および地域社会を代表とする水設備管理委員会の設立支援や、水道の運用・維持、水道料徴収のメカニズムの開発サポートなど、水道システム設置後の管理体制を整備。

5）水源保護の重要性に関する意識向上のため、学校の生徒と教師を対象とした啓発授業を実施。

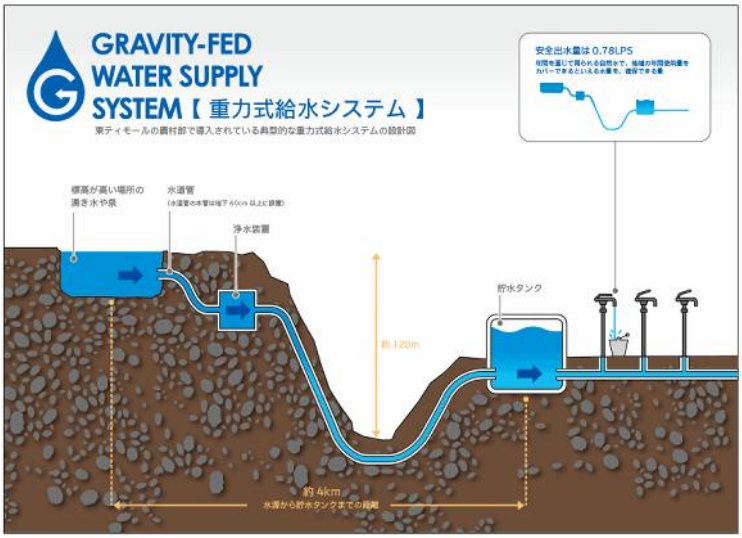
6）東ティモール政府の諸機関や国内・国際 NGO と連携して、国内の全ての人たちが安全な水にアクセスできるようになることを目指したアクションプランを策定。



■給水施設（重力式給水システム）の概要

大野市の寄付で設置される重力式給水システムは、山岳地帯で険しい斜面が多い地形を生かし、標高の高い場所にある湧き水や泉などの水源から、標高の低いコミュニティまでパイプをつなぎ、重力という力を利用して水を供給する仕組みです。費用対効果が高く、二酸化炭素を排出しないので環境にやさしいシステムです。

大野市は、２０１６年１月に、日本ユニセフ協会とパートナシップ協定を締結し、東ティモールへの支援を決定しました。「地域と使途を明確にした支援」として、日本の自治体としては初めてユニセフの指定募金を活用し、年間１０万ドル以上、複数年での支援をしています。この支援によって、前述しましたが、年間２基、３年間で６基の重力式給水システムの設置します。



■東ティモールにおける支援活動　今後の予定

東ティモールで大野市が給水システムの設置を支援する集落では、現在建設が始まっており、２０１７年７月に完成する予定となっています。この施設建設と合わせて、村人が自身の手で給水システムを運営していくための水管理委員会の設立や、施設を維持していくのに必要な資金を稼ぐための料金徴収システムなどのソフト面も支援していきます。

給水システムが完成したのちに、もう一度視察に訪れたいと考えており、その後も、東ティモールと大野市で何らかの交流を持っていけるように、現在検討しているところです。

■日本ユニセフ協会とのパートナーシップ締結に至った背景

水への恩返し
Carrying Water Project

unicef
公益財団法人 日本ユニセフ協会

私たちが暮らす日本は、世界平均の約２倍の降水量と、行き届いた水道設備を誇る、水に恵まれた国です。しかし、ひとたび世界に目を転じると、いまだに 6 億 6,300 万人もの人々が、水道も、整備された井戸も利用できず、生きるために欠かせない安全な水さえ手に入れられずにいるのが現状です。安全な水がない環境で、真っ先に命を落とすのは抵抗力の弱い、幼い子どもたちです。汚れた水を飲んだり、水不足で身体を清潔に保てないなどの理由で下痢性の病気にかかり毎日 1,000 人近くの子どもたちが５歳を迎える前に命を落としています。今回支援を行うことを決定した東ティモールでも、改善された水源を利用している人の比率は、95％（都市部）、61％（農村部）、70％（全国）という状況です（2012 年現在）。

水は「貴重な財産」であり「アイデンティティ」と考える大野市では、水を通じた社会・世界貢献を考えています。なかでも国際的な貢献活動は「水への恩返しをするまち＝大野市」を世界へ発信し、ブランドを確立するための主要事業と考えています。

水に関して困難を抱える地域と絆を結び、支援や交流を図ることによって、大野市民が自らのアイデンティティをより深く理解するきっかけとします。同時に、実質的な貢献を実施・経験することで、水に恵まれた大野市民一人ひとりが「水への感謝（恩返し）」を行う機会にもなります。

また、大野市は、「かけがえのない大野人（おおのびと）」の育成を目指し、以前より、重要な市民の“ひとり”であり、かつ将来の大野市を担う「子ども」に関する様々な取り組みも積極的に行ってきました。これらは、ユニセフが世界的に進める「子どもにやさしいまち（＝Child Friendly Cities）事業」の思想とも合致すると考えます。

大野市が掲げる「水」と「子ども」という二つのテーマに基づき、国境を越えてできる社会貢献を考えた結果、東ティモールへの支援を実施するに至りました。この支援を通じて、ひとりでも多くの東ティモールの子どもの命が救われ、無事に成長することを祈っています。具体的な募金活動および資金調達は、これまで 50 回以上の歴史を持つ「越前大野名水マラソン」の参加者から寄付を募るほか、「水への恩返し Carrying Water Project」で行う様々な活動の中で募金を行います。また、寄付という概念的行為だけにとどまらず、現地の人々と直接触れ合う交流機会などを設けていくことも検討しています。

■大野市「水への恩返しCarrying Water Project 」とは?

大野市は、福井県の東部に位置し、四方を高い山々囲まれている盆地です。日本海から吹く風は、春・夏・秋には山々を駆け上って雨となり、冬には山々をすっぽりと覆うほどの雪となります。四季を通じて降る雨や雪は、地中でゆっくりと濾過され、清く豊かな湧水となって大野市を潤しています。市民は古くからその湧水を「清水(しょうず)」と呼び、生活の中に取り入れてきました。

大野市民にとって、水はまさしく「貴重な財産」であり「アイデンティティ」です。その水に着目し、改めて市民や関係者に「水への誇りと自信」を持ってもらうことで、一致団結・協力・共創しながら、人口減少対策として、まちの活性化につなげていくのが「水への恩返し Carrying Water Project」です。

※「Carry」という言葉には「運ぶ」という意味のほかに「伝える」という意味があります。大野市から「水への感謝の気持ち」を“支援”という形で届け、そのメッセージを大野市民に「伝える」というものです。

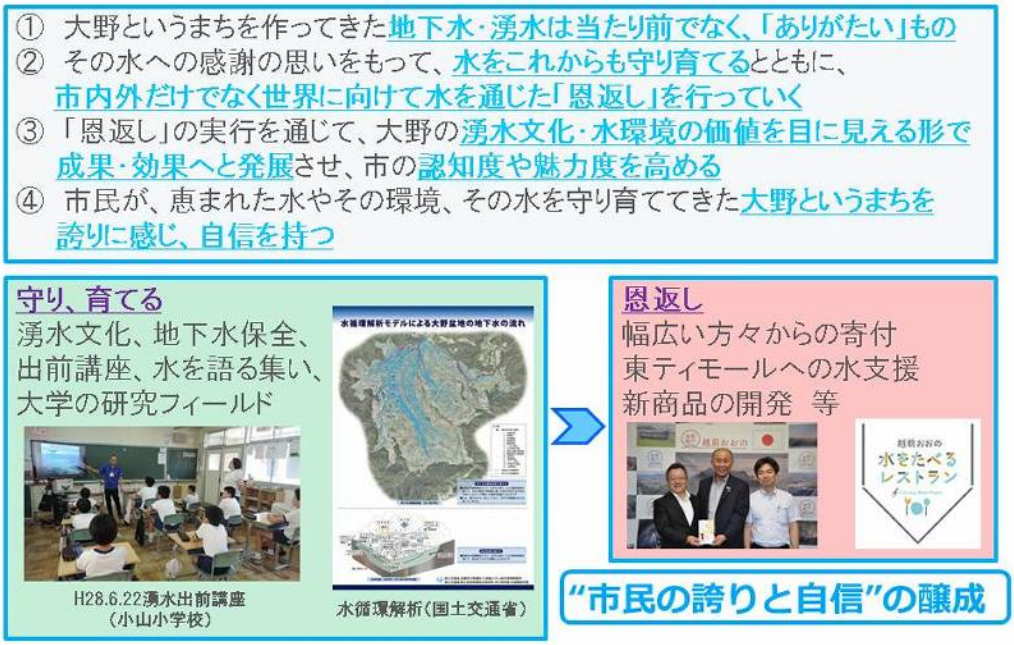
◆水への恩返し Carrying Water Project の目的

（日本国内の地域間競争を超えて、世界に通じる価値として…）

大野の歴史や文化、伝統を連綿と支えてきた豊かな**「水の恵み」**について
国内のみならず、**世界に向けて広く発信**するとともに
大野に暮らす人自身が、自らの**アイデンティティとして再認識**し、
これを核として、**新たな産業基盤の創出**や
人材教育・育成、地域資産・産品の競争力強化を図り、
中長期的な人口減少対策を図る。

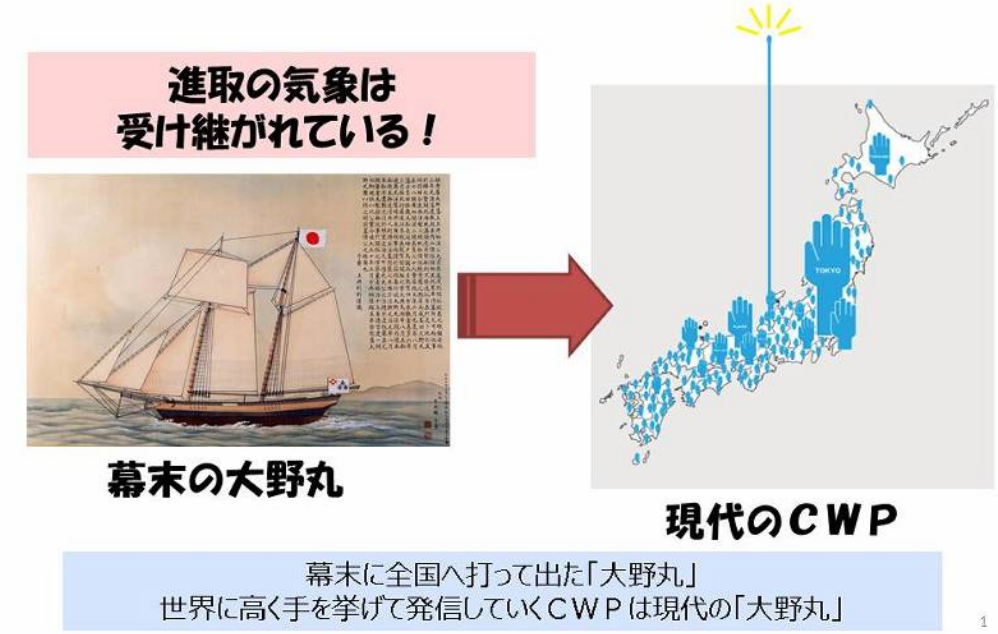
◆水への恩返し Carrying Water Project のビジョン

◆水への恩返し Carrying Water Project の考え方



「水への感謝の気持ち」を持って、将来にわたり「水を守り育てていく」とともに、世界に向けて「恩返し」として伝えていきます。こういった「恩返し」を行うことで、大野の湧水文化や水環境の価値を、何らかの目に見える形での成果や効果へと発展させて、大野市の認知度、魅力度の向上につなげていきます。

そして、市民が、恵まれた水やその環境、その水を守り育ててきた「大野というまち」そのものに誇りを感じ、「大野というまち」そのものに自信を持ってもらうことにつなげていきます。



かつて、幕末の大野藩が、洋式帆船「大野丸」を用い、広く全国各地に目を向けて、北方と交流・交易し活躍していたように、かつての大野人の進取の気象は、現在に受け継がれており、世界に向けて発信するこの事業にも表れています。

■大野市「水への恩返し Carrying Water Project」 今後の活動予定

「水」というアイデンティティの再認識・再構築を目指します

今回のユニセフとの東ティモールへの給水施設の寄付をはじめとして、今後も、市内外、世界に向けて、「大野の水」をアピールしていく活動を展開します。それらの活動を通じて大野市民のなかにある「水」という価値を再認識し、まちのアイデンティティとして再構築していきます。

●活動1．市民との協働 PR

・越前おおの冬物語[2 月]

市民にとっては長く厳しい冬の暮らしを強いられる「雪」もまた、春が来れば、豊かな「水」に変わります。大野の冬の一大イベントである「越前おおの冬物語」にて、幻想的で美しい雪のイベントを通じ、「雪と水の関係性」に改めて目を向けてもらいます。

・越前大野名水マラソン[5 月]

今年 53 回目を数える市民マラソン。全国各地からも多くの人が参加し、「水のまち、大野」をアピールする大きな機会です。参加者からのドネーションを募ることで「おいしい水を届けるマラソン」であるとともに、チャリティマラソンとして、世界と大野を結んでいきます。

昨年 5 月 22 日（日）に開催された「第 52 回大会」では、参加者が 1km 走るごとに 10 円を、東ティモールの水環境整備の支援のために寄付するユニークな取り組みをおこないました。本大会のエントリー数は過去最多の 4,965 人、その合計走行距離は 49,504.51km となり、大会実行委員会から大野市へ、東ティモールの水環境整備のため、495,040 円を寄付しました。

・おおの城まつり［8 月］　ほか

その他、大野で開催される各種イベントにて、市民と協働しながら PR 活動を行うことで、対外的なブランディングと同時に、市民自らが改めて「水の恵み」に目を向ける機会としていきます。

●活動2.　専門人材の育成･教育

将来的に大野市のみならず、全国・全世界の水ビジネス・水問題に関わる人材を輩出することを狙った専門教育プログラムづくりを検討しています。

「水のがっこう」事業では、子どもたちへの水教育の実施のほか、大野市が今までに培ってきた地下水に関する各種データや、研究内容などを集約したウェブサイトを構築し、水に関する様々な情報を提供していきます。

●活動3.　地域産品振興

大野には「米」「そば」「里芋」「醤油」「日本酒」をはじめとした多くの地域産品があります。これらは「大野の水」に育まれた素晴らしい食材たちです。水が良いから、食べ物がおいしい。このシンプルだけれど大切なことを改めて訴求していきます。

この「大野の水」をブランド化していくために「水をたべるレストラン」事業を開始し、統一したロゴシールを張り、大野の水ブランドとしての視覚の同一視化を図ります。市民の自主的な参加を促しており、地元菓子組合や蕎麦屋などで、活動が開始したところであり、今後も各方面に活動を広げていきます。

●　活動4. 自然環境保全

「大野の水」を将来にわたって、守り引き継いでいくための自然環境保全や研究を引き続き積極的に行っています。

地下水保全条例に基づき、地下水位の監視や水質の検査、地下水使用量の把握などを実施するとともに、地下水涵養林であるブナ林の保護や、冬季の水田における湛水事業、子どもたちによる森づくり事業、市民有志による遊水地の清掃活動など、様々な取り組みを通して水と自然環境を保全しています。

また、大学等の研究機関と連携し、地下水の研究を進め、今後地下水を守っていくために必要な基礎データの収集などにも務めています。

◆公益財団法人日本ユニセフ協会について

190 以上の国と地域で子どものために活動するユニセフ(国連児童基金)の日本における国内委員会。日本においてユニセフを代表するユニセフ協会(国内委員会)として、1955 年に財団法人として設立され、(2011 年に公益財団法人へ移行認定)、民間のユニセフ募金を集めるほか、 ユニセフの世界での活動や世界の子どもたちについての広報、そして、「子どもの権利」の実現を目的としたアドボカシー(政策提言)活動を行っています。各国のユニセフ協会(国内委員会)は、ユニセフと「協力協定」と呼ばれる公式文書を締結しており、同協定は「ユニセフ協会(国内委員会)は各国の市民社会においてユニセフの利益を代表し、かつ促進する、ユニセフの唯一のパートナーである」と定めています。

名　称　:公益財団法人　日本ユニセフ協会　the Japan Committee for UNICEF

所在地　:〒108−8607 東京都港区高輪 4-6-12　ユニセフハウス

代表者　:会長　赤松　良子

設　立　:1955 年 6 月 9 日　(2011 年 4 月 1 日　公益財団法人移行)

◆東ティモールについて

[国名]　東ティモール民主共和国(The Democratic Republic of Timor-Leste)

[面積]　約 1 万 4,900 平方キロメートル

(東京、千葉、埼玉、神奈川の合計面積とほぼ同じ大きさ)

[人口]　約 121.2 万人(2014 年、出典:世界銀行)

[首都]　ディリ

[民族]　テトゥン族等大半がメラネシア系。その他マレー系、中華系等、ポルトガル系を主体とする欧州人及びその混血等。

[言語]　国語は、テトゥン語及びポルトガル語。実用語に、インドネシア語及び英語。その他多数の部族語が使用されている。

[宗教]　キリスト教 99.1%(大半がカトリック)、イスラム教 0.79%

[概要]

インドネシア東部に位置するティモール島の東半分に位置する島国。

16 世紀前半、ポルトガルに始まり、オランダ、日本、ポルトガル、インドネシアが支配。1999 年には分離独立の是非を問う住民投票が行われ、住民の約 8 割が独立を選んだ。しかし、その後、独立反対派の武装勢力により治安が悪化。2002 年にようやく独立に至った。以後も治安の悪化を繰り返しながらも、2009 年を「インフラの年」と位置づけ、政府による国作りが進んでいる。しかし、今もなお、約 37%の国民が1日1．25ドル以下で生活する厳しい状況が続いている。特に農村部では保健や教育、水と衛生などの基本的なサービスが未だに十分に行き届いていない。

[データ]

乳児(1 歳未満児)死亡率:出生 1,000 人あたり 46 人／2013 年

5 歳未満児死亡率:出生 1,000 人あたり 55 人／2013 年(日本は 3 人)

改善された水源を利用する人の比率:95%(都市部)/61%(農村部)/70%(全国)／2012 年

改善された衛生施設を利用する人の比率:69%(都市部)/27%(農村部)/39%(全国)／2012 年

◆福井県大野市

［市長］ 岡田高大 （おかだ たかお）
［人口］ 3 万 4, 788 人 （住民基本台帳人口／2017年1月1日）
［面積］ 872.43km² （福井県最大）
［隣接市］
福井県／福井市、勝山市、今立郡池田町
石川県／白山市
岐阜県／高山市、郡上市、関市、本巣市、揖斐郡揖斐川町
［概要］

福井県内の市町の中では最大の広さを持ち、県面積のおよそ 5 分の 1 を占める。戦国時代に築かれた越前大野城は、現在は「天空の城」として有名で、そのふもとに広がる碁盤目状のまち並みは、かつての城下町の面影を強く残し、“北陸の小京都”と呼ばれています。

「名水百選」に選ばれた御清水（おしょうず）や「平成の名水百選」に選ばれた本願清水など、まちの至るところで湧く清水は、城下町とともに代々守り伝えられてきた生活文化です。

水への恩返し Carrying Water Project に関するお問い合わせ先

大野市 産経建設部 建設整備課 湧水再生対策室
TEL：0779-64-4813
yusui@city.fukui-ono.lg.jp

（参考）

日　　時　1月28日（土）午後7時～9時
場　　所　ツイタチビル　2階　SONOU（大野市元町8－15）
定　　員　60名（入場無料　定員になり次第締め切り）
テ ー マ　東ティモール視察報告会
内　　容　元ユニセフ駐東ティモール事務所代表久木田純氏による東ティモールの紹介、東ティモール現地視察メンバーによる報告会、今後の事業推進に係る参加者との意見交換会
申込方法　電話かファクス、電子メールで申し込む
問合せ先　大野市役所　湧水再生対策室
TEL 64-4813　FAX 66-1118　電子メール yusui@city.fukui-ono.lg.jp

‘Carry’という言葉には「運ぶ」という意味ともうひとつ、
「伝える」という意味があります。

水への恩返しCarrying Water Projectは、大野の類まれなる水循環環境と
その可能性を大野の魅力として発信するとともに、
大野の誇りとして「次世代へと伝えていく」ことを目的としています。

水への恩返しCarrying Water Projectでは、市民の皆様と、
プロジェクトをより良いものにしていくために
継続的に対話の機会を持ちたいと考えています。

昨年10月に市職員、日本ユニセフ協会などで現地視察を行い、
既にユニセフの支援により給水設備が設置されている集落と、
これから大野が支援する集落を見てきました。
その現地視察の報告をいたします。

また、大野が給水施設を支援する「東ティモール民主共和国」について、
ユニセフの東ティモール事務所代表として現地で活躍しておられた
久木田純氏をお迎えし、東ティモールってどんなところかお聞きします。

そして、この東ティモールへの支援を通して、
市民に伝えていけること、市民ができることについて
参加者を交え、大野の未来に向けて自由な意見交換を行います。

東ティモール民主共和国とは？

2002年に独立したアジアで一番若い国。

日本の南4000キロ、オーストラリアの北300キロにあり、
インドネシアの東端ティモール島にある島国。

日本の真南にあるため、日本との時差はない。

国づくりが急ピッチで進んでいますが、道路やトイレ、
給水設備など、生活インフラの整備は進んでおらず、
安全な水を確保できる人の割合がアジアで最も低い国。

首　都：ディリ
人　口：約121．2万人（2014年）
面　積：約14，900㎢
公用語：テトゥン語、ポルトガル語
産　業：農業（コーヒー、米、
　　イモ類、とうもろこし　など）

久木田　純（くきた　じゅん）プロフィール

関西学院大学学長直属SGU招聘客員教授
元ユニセフ駐東ティモール事務所代表

1955年福岡県生まれ
西南学院大学文学部卒業
九州大学大学院教育心理学研究科修士課程修了（教育学修士）
同科博士課程就学中に外務省の若手国連職員選抜試験に合格

国連職員としてUNICEF駐モルディブ事務所に派遣され、駐日事務所、
駐ナミビア事務所、駐バングラデッシュ事務所、ニューヨーク本部を経て、
駐東ティモール事務所代表、駐カザフスタン事務所代表を歴任。
2015年1月国連退官。
駐東ティモール事務所赴任中の2011年、同国の外国人への栄典としては
最高位である東ティモール共和国勲章を受勲

古民家での自給自足生活を実践中